

読書を考える —教師自らが良き読書人となるために—

カリキュラム開発専修 伊 東 英

1. はじめに

岐阜大学教育学部で行なわれる10年経験者研修（岐阜県においては「12年目研修」として実施されている。以下、12年目研修）の大学研修に全教育学部教員が研修コースを提供することとなった際に、現在全国の学校現場で推進されている「朝の読書活動」をサポートできるような内容のコース、あるいは総合的な学習の時間や他の機会を利用した読書活動を支援できるような内容のコースを提供しようと構想し、コース名を「読書を考える」と題して、毎年開講してきている。

実際に朝の読書活動は小学校から高等学校まで校種を問わず広く実践されているのは表1の通りである¹。この表から分かることは、岐阜県の学校全体としては全国平均よりも朝の読書実施率は高いが、特徴的な点としては中学校ではそれがかなり低く、それを小学校と高校での実施率の高さが補っていることである。また、平成19年10月に発表された文部科学省の「平成19年度全国学力・学習状況調査の調査結果のポイント」の〈学力向上に向けた取組〉によると、「朝の読書」などの一斉読書の時間を設けている学校の割合は、小学校調査においては約92%、中学校調査においては約84%である、と紹介されている。

岐阜県の朝の読書実施校数			
全体	小学校	中学校	高校
478	317	117	44
岐阜県の朝の読書実施率、()は全国			
72% (66%)	82% (71%)	59% (70%)	56% (36%)

表1 岐阜県の朝の読書実施状況

OECD生徒の学習到達度調査（PISA調査）における読解力不足が日本の教育の問題点としてかねてより指摘されている。その解決策のひとつとして文部科学省も読書活動の推進を提唱しているところであるが、PISA調査が15歳児（高校1年生）を対象として実施されていることを考慮するならば、岐阜県では中学校の読書活動をさらに充実することが対策のひとつとなりうるであろう。

1 この表は、朝の読書推進協議会調べ「朝の読書」全国都道府県別実施校数一覧、平成20年1月25日現在、から岐阜県のデータを抜き出して作成した。朝の読書推進協議会 URL (http://www1.e-hon.ne.jp/content/sp_0032.html)

岐阜県を含めて学校において全国的に広く実施されている読書活動ではあるが、その量や質は千差万別であり、研修教員の学校現場における実態報告や日々接する学部学生たちの学校時代の経験話を聞く限りにおいては、必ずしも効果的な読書が実践されているとは言い難い状況も見られる。読書の指導者である学校教員を考えると、それは必ずしも国語を専攻した教員であるとは限らないし、学級担任が行なう活動であるとすれば実際には国語以外の教師が多数を占めている。教師が日々の学校での本来の業務の傍らでの読書指導ということもあって、読書そのものを自らの問題として考える機会が持てない事情も考慮される。さらに児童・生徒の学びの場であり読書の場である学校図書館の整備・充実の問題も学校空間での読書を考える際には避けて通ることのできない大きな問題である。

このような状況を踏まえた上で、研修教員が何らかの意味で読書に関連した自己の研修テーマを追究できるように大学教員が支援するとともに、研修教員自らが良き読書人として生涯読書を実践し、その姿に児童・生徒たちが影響を受けるような、研修教員自身が自己の振り返りの機会を得られる内容の12年目研修となるよう、この大学研修を構成している。本コース参加者数はこれまで、平成17年度は小学校4名、中学校・高校各1名の計6名、平成18年度は高校教員が2名、平成19年度のコース参加者は小学校教員が2名であった。以下に、平成19年度の実践に即して報告と考察を行なう。

2. 大学研修内容

大学研修5日間の第1日目と第5日目は大学で実施し、中間の3日間は研修教員が職場を中心にして自己研修をするように全体のプランが組まれている。そのため、第1日目にはコース参加者の自己紹介と研修内容の確認、事前に提示してある課題を基にして全員での読書一般と各自の研修課題についての議論、大学図書館の閲覧と利用、主として自己研修の際に利用するAIMS-Gifuの使用法の説明等が研修内容の中心となっている。また研修第5日目には、ペーパーによる研修報告の提出と各自の研修成果をプレゼンテーション形式で発表し、意見交換を行なう。このようにして大学研修の8月初旬の開始から8月下旬の終了までの約1ヵ月を構成しているが、研修教員が学生だった頃には現在の大学におけるほどICT活用が当時はなされていなかったこともあり、ネット環境が十分でない場合や、そもそもコンピュータの操作に慣れていないためにAIMS-Gifuの利用やプレゼンテーションの準備にかなりの負担を感じてしまう研修教員が少数ながら存在することに留意しなくてはならない。以下に大学研修の内容を第1日目と第5日目に分けて紹介する。

①大学研修第1日目

午前中には研修教員と大学教員が初めて対面するので、自己紹介と研修テーマに関して意見交換を行なった。

- 1) 自己紹介： 本年度は参加者がともに小学校教諭であるA、B2名で、A教諭は読書先進校に、B教諭は読書発展途上校に勤務している。
- 2) 研修テーマの紹介： A教諭「仲間とともに心を高める読書指導」、B教諭「学校図書館の運営について学び、子どもにとって楽しめる学校図書館作りをする」。A教諭は読書先

進校での実践を担うために、読書活動の質の向上を中心に考えようとし、また読書発展途上校勤務のB教諭は、そもそも生徒たちが読書そのものを楽しめるような学校図書館運営を研修テーマとしている。

- 3) 読書について： 本コースのテーマである読書を、事前の読書課題として提出しておいた『読書力』（齋藤孝、岩波新書）を基に議論。同書は主として大学生を読者対象としているが、研修教員にも自己の読書を見直す契機となる内容が含まれている。教師自らが良き読書人たるべきである。

昼休みを挟んで、午後は次のように展開した。

- 4) 大学図書館訪問と利用： 研修教員は内地留学生の扱いで大学図書館の利用が可能である。昼食後に図書館へ研修教員を赴かせて、自由に図書を閲覧あるいは必要な図書が見つかった場合には貸し出し手続きを取るよう指示し、実際ふたりの研修教員は図書館蔵書を研修のために参考文献として借りた。
- 5) AIMS-Gifuの練習： 自己研修期間中に使用するAIMS-Gifuに実際にPCを用いてログインし、練習用掲示板においてメッセージ交換やファイル添付の操作を実体験した。毎年のことであるが、この練習を研修第1日目に実施することで、研修教員との連絡は容易になる。また、他のコースに参加した研修教員の話としてAIMS-Gifuの使用法が分からなくて苦労したという報告もあるので、これは大学研修全体の問題として対応すべきである。
- 6) 各自のテーマとコース課題： 午前中に発表した各自の研修テーマに関して意見交換を行い理解を深めるとともに、研修方法について話し合う。また研修第5日目に研修成果の発表として20分程度のプレゼンテーションを行なうことを指示。これは今後研修教員が何らかの機会に、プレゼンテーション形式の発表を行なう際の練習として毎年実施している。

②大学研修第5日目

研修の最終日は、再び大学に研修教員が集まり、研修成果の報告や研修の反省ならびに今後どのように研修の成果を学校現場での実践に役立てるかについて議論する機会とした。

- 1) 午前中には、研修の成果発表をプレゼンテーション形式で一人約20分ほどで報告し、その後大学教員を交えて意見交換を行なった。自己研修期間中にAIMS-Gifuでそのときどきの研修内容の進捗状況が報告されていたが、全体としてまとまったものを写真を含めてプレゼンテーションで提示されることで、研修内容が具体的によく掴むことができた。
- 2) 午後には、午前中の研修成果の報告を踏まえて、学校現場での2学期以降の実践に研修成果をどのように活かしていくかを全員で討議した。

3. 研修教員の学び

本年度の研修教員は2名であり、両名ともに本コースの主旨に沿った読書活動の勤務校での実践を考慮した実践的な研修テーマに取り組んだ。大学教員として筆者は研修教員に次のような情報提供や助言を行なって研修を支援した。

- 1) 読書活動の先進的取組を行なっている山形県鶴岡市立朝暁小学校の実践例の紹介
- 2) 読書活動に関する文献紹介

3) 学校における読書活動の実態調査の紹介

4) 自己研修中の具体的な作業への助言

このような情報提供や研修支援が、各々の研修教員が研修テーマに関する調査や実践を行なう際にいくらかでも役立ったことが、研修後に提出されたコメントから窺える。また、最終日に研修報告としてプレゼンテーションを行なうことは第1日目に通知してあるが、当初の研修教員の反応は、これまでやったことのない報告形式だということで戸惑いや反発が毎年あるが、実際にプレゼンを経験することで、それが研修内容をまとめるために有効であったとプラスに評価されている。以下に大学研修終了後の研修教員のコメントからいくつかを紹介することで、研修教員の学びの展開を見ることとする。

- ・ 5日間の研修のうち1日目と5日目に大学に伺うのは、学生時代を思い出すと共に、新鮮な気持ちや刺激も味わうことができました。
- ・ 読書について学びたいという思いはあったものの、自分自身の問題意識が十分に焦点化されていない中で、研修の初日を迎えたというのが正直なところでした。初日の研修では、先生に勤務校の実践や児童の実態を聞いて頂き、その上で今後の研修の方向性を示して頂きました。今後の実践のためにも、今回の研修では理論面から考えていくと良いと思いました。また研修最終日には、改めて方向性を示して頂き、今後の実践につなげていきたいと感じました。
- ・ 読書活動の意義について考えられたことが、私にとっては今回の研修の一番の収穫と言っても良いと思います。これまで実践の中で児童の様子から読書のよさを感じてはいました。しかし理論的などのようなよさであるのかは、考えると良いと思いつながら、日々の多忙の中で時間を積極的にとることができませんでした。この研修のおかげで、考えることができ、実践を支える力となったと思います。
- ・ 自己研修のテーマが「図書館の運営について学び、子どもにとって楽しめる図書館作りをする」ということでしたので、この大学研修は自分にとっても大変勉強になりました。ありがとうございました。担当者が提案をして、全校体制で動けるということが一番大切ですね
- ・ 自己研修の3日間（実質的には、その倍？3倍？）は、正直大変でした。でも、このような学びの機会を自分でつくることは（望ましいと思いつながら）なかなかできないので、今は充実した夏休みにできたなあと思っています。
- ・ 初日に「最終日にプレゼンを」と提案をされた時には、正直困りました。でもこれを機会にと思い、パワーポイントに挑戦できたことは、今となっては、よいチャンスを与えていただいたと思います。プレゼンがあることで、研修の日数と負担感は増えましたが、研修の中身は濃くなったと思います。
- ・ 読書の大切さを改めて自覚するとともに、やはり読書の大切さを子どもにも職員にも伝えていきたいと思った研修でした。どうもありがとうございました。（まずは、自分の読書時間を毎日少しずつ作り出していこうと思います。）

4. おわりに

12年目研修の大学研修が研修教員と大学教員の双方にとって、どのような意味があるのか改めて考察してみると、そのメリットとして研修教員という学校現場の中堅教師と短期間ではあっても大学教員が直に接することは、日頃の学生指導の面において現場の状況や問題点を知る上で極めて有意義な機会になりうるという点がまずは挙げられる。今年度の筆者のコースの場合を見

ても、読書活動の先進校と発展途上校の両方の現状を聞き知ると同時に、それぞれがどのような問題を抱えているのかということも研修教員の報告から把握でき、読書活動に興味関心を持っている現役学生への情報提供が正確なものとなった。一方、研修教員にとっては、かつての学び舎で研修が行われることで、取り組む姿勢をリフレッシュし、また自らの研修テーマに関して大学教員ならびに同僚の研修教員と意見交換できることに意義を見出しているように思われる。また、自らが良き読書人として生涯読書に親しみ、指導する児童・生徒たちに読書の良さを実体験として伝えていくような教師になってもらいたいという筆者の希望も、それぞれの研修教員には受け入れてもらえたと実感している。

問題点としては、例年のことであるが、読書活動や読書指導に関する研修教員個々の研修テーマを深く追究しようとする、自己研修3日間ではとても足りないことや、研修レポートと併せてプレゼン形式での発表を求めることで負担感が増大すること等が挙げられる。これらの問題については、今後この研修コースを維持する場合に考慮すべきであろうが、そもそも読書をする、読書に関する研究をするということは時間を要する作業であることを再認識させられた。

本稿の冒頭で触れた2000年に実施されたOECD生徒の学習到達度調査（PISA2000年調査）では、読解リテラシー（読解力）が主要分野となった。このPISA2000年調査の報告書では、「生徒の背景と到達度」の関連を調査し、次の10項目の読書活動に関して興味深い結果を導いている²。

- (1) 毎日、趣味としての読書をどのくらいするか。
- (2) どうしても読まなければならない時しか、本は読まない。
- (3) 読書は大好きな趣味の一つだ。
- (4) 本の内容について人と話すのが好きだ。
- (5) 本を最後まで読み終えるのは困難だ。
- (6) 本をプレゼントされるとうれしい。
- (7) 読書は時間の無駄だ。
- (8) 本屋や図書館に行くのは楽しい。
- (9) 読書をするのは必要な情報を得るためだけだ。
- (10) じっとして本を読むなど、数分しかできない。

詳細に説明する余裕がないので簡単に要約して述べると、日本の生徒は趣味としての読書はしない、本を読むことが苦手である。しかし一方では、本の内容について話すのが好きで、本をもろうと嬉しく思い、また読書に価値を置き、本屋や図書館に行くことを好んでいる。

PISA調査や平成19年度全国学力・学習状況調査の結果から、読書好きな生徒の読解力の成績が、そうでない生徒よりも上位であることは確認されている。生徒たちが「生きる力」を獲得して、豊かな社会生活を送るためにも、学校では読書活動を活性化させることが今後も求められることは間違いない。「読書を考える」研修コースに参加した研修教員が、読書人として読書活動の積極的な意義を再度認識し、勤務校における読書活動、読書指導の中心的存在として活躍されることを願ってやまない。

2 国立教育政策研究所「生きるための知識と技能」、ぎょうせい、2002、p.081-087。